

日本記者クラブ会報

第337号
1998年
(平成10年)
3月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100-0011
◎社団法人 日本記者クラブ
電話三五〇三一二七二(代)

うれしかったコラムの報道

「編集手帳」と「筆洗」に感謝

会員のみなさん、二月十八日の読売新聞朝刊の一面コラム「編集手帳」をお読みになりましたか。

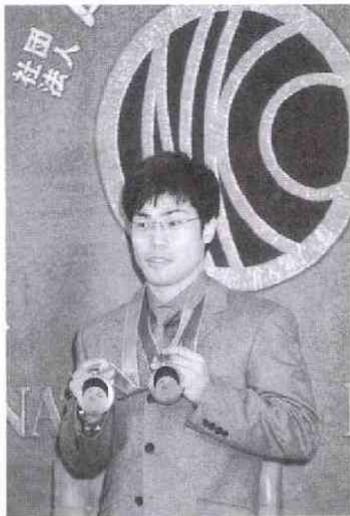
感激しました。何と、すべてにわたって、当クラブの会報が取り上げられていたのです。昨年末に行ったサッカー日本代表の岡田武

史監督の会見内容です。詳報を会報の一、二月号で連載しましたが、それを「各国要人らが来日の折な

どに記者会見を催す日本記者クラブは、時に話題の人を招く」と報じていたのです。そして「岡田監督の話はすぐれて教育論でもあ

る。スポーツ界だけでなく、なお社会全体の宿題として厳しく受け止め、考え続けたい」と結んでありました。

さっそく反応がありました。東京・千代田区の教育委員会、千葉・船橋市の東武百貨店広報部、栃木県の高校の先生から「全文を読みたい」と事務局に電話がかかったのです。



若々しいダブル・メダリストの清水選手 (2・25)

会見直後も、静岡のサッカー大好き女の子と常磐大学スポーツ社会学の女の先生から要望があったほか、娘さんが小学校のサッカー選手という事務局員も、監督とコーチ五人に頼まれてコピーを差し上げたそうです。

実は私も、友人の郵政省某局長と某会社の会長にお送りしました。某局長は、息子さんのたつての願いだそうで「愚息が『オー』と感動の面持ちでおりました。親の株も少々上がった次第です」と礼状に書かれておりました。また某会社では、次々にコピーされて社内中にゆきわたったそうです。もう一つありました。一月二十七日の東京新聞の一面コラム「筆洗」です。前日に行ったスペースシャトル「コロンビア」の宇宙飛行士の土井隆雄さんらクルー八人の会見が紹介されたのです。「世界平和」と「宇宙文化」を語った、

クルーの人格の輝きがまだ記憶に残ります。この会見の詳報は月号に収録しました。再読ください。

昨年、クラブ行生活活性化策の一つとして「報道にあたっては『日本記者クラブで会見し』を徹底する」と決めていただきました。

なんとか守られてきました。しかし、この方針を打ち出した当初、正直言って情けない気持ちでした。

来年、三十周年を迎える日本記者クラブです。何をいまさら、そんな原則論を訴えねばならないのか、という思いがあったからです。

そんなやりきれなさを「編集手帳」と「筆洗」が吹っ飛ばしてくれたのです。当クラブのステータスがグリーンと上がった思いです。改めて筆者に感謝いたします。

二月は、公式実務のアリエフ・アゼルバイジャン大統領を含めて六件七人のゲストを迎えました。中でも光ったのは、冬季オリンピック長野大会のスピードスケートで金と銅の二つのメダルを獲得した清水宏保選手の囲む会でした。

詳しくはクラブゲスト欄をご覧ください。(専務理事 那部 吉正)

ク ラ ブ ゲ ス ト

黒田 祿郎 東京商工リサーチ情報事業統括本部長補佐



研究会「企業倒産」委員
2.6 (金) 羽生健二 89人
司会 出席

「日本発の世界恐慌」すら懸念される中で、倒産ウォッチャーの第一人者である黒田さんを招いて開かれた企業倒産研究会は盛況であった。

企業倒産は景気のパロメーターだが、大型倒産や金融機関の破たんが相次いだ九七年の倒産件数(負債一千万円以上)は一万六千四百六十四件(前年比一〇・九%増)と平成に入って最多。負債総額では十四兆四百四十七億円(同七二・九%増)と戦後最大、最悪の水準を記録した。こうした倒産多発で十五万人以上の従業員が被害を受けており、GDPの三%に相当する経済損失をきたす激震に見舞われたことになる。

しかも、倒産統計には山一証券、北拓、日産生命など内外を震かさせた金融機関の大型破たん処理はカウントされないため、今日の経済危

機の実態はもつと深刻だといえる。

この道三十年の黒田さんは「上場会社から中小企業までバタバタとつぶれる状況は想像を絶するもの」とコメントしたが、今日の平成大不況は企業や金融機関にとって空前の大整理淘汰期の到来であることを改めて浮き彫りにしたといえよう。

倒産の原因だが、販売不振、赤字累積、売掛金回収難など不況型が六割強を占めたが、銀行の貸し渋り(というよりも貸金の回収)による金詰まり・黒字倒産が急増していることは要注意である。信用収縮が経済活動を萎縮させ、倒産を多発させる悪循環が不安を増幅している。

倒産の嵐は全産業、全地域に波及しており、まさに日本列島は冬景色一色におおわれている。

政府は「花便りのころには景気は上向く」と楽観論を流すが、ミクロ面から実体経済を観察する黒田さんは「明るい材料は全くみられない。九八年経済は波高し」と診断する。

個人D会員(日刊工業新聞OB)

松本 明男

アンワル・イブラヒム マレーシア副首相兼蔵相

久しぶりに会見に出席したら、ゲストのアンワル副首相をばさんで壇上に二人の女性が並んだので少々驚いた。マレーシアでは女性でも大臣、高官になれますよというデモンストレーションかとも思えたが、ほかに理由があったのかもしれない。せっかく壇上上がったもらったのだから、副首相だけでなく二人にも質問すればよかったと、これは後になつて気がついた。

会見のテーマが当面の最大の問題であるアジアの経済危機だっただけに、副首相の発言も会場の質問も、目の前の現実に即した内容になったのは当然で、引き締まった雰囲気の見会だった。だから副首相以外への質問を思いつくほどの余裕がなかったのだが、高い地位について東南ア



シア女性から特に経済問題についての見解を直接聞けるチャンスだったのに、惜しいことをしてしまった。

副首相は質問にはてきばきと答え、日本の対応ぶりにも「存在感が薄い」などと遠慮なく注文をつけて、司会者からマハティール首相の有力後継候補と紹介された通りの実力者ぶりを見せた。欲を言えば、ASEANの域内通貨決済構想や米国の反対で流産したアジア通貨基金構想について、もつと詳しく聞きたかった。

時間の制約もあったのだから、一般論でそつなく逃げた感じだ。

昨年だったと思うが、同じ会場で会見したマハティール首相には、ぐさりと突き刺すような強烈な鋭さがあった。それに比べると、鋭くはあつても人を刺す毒がやや弱いという印象が残る。後継確定にはもう一歩なのだろう。

個人D会員(共同通信OB)

秋山 民雄

2・10(水)記者会見 司会 羽生健二委員 通訳 池田薫 出席 117人

ク ラ ブ ゲ ス ト

大場智満 国際金融情報センター理事長



2.18 (水) 研究会
「アジア通貨危機」
司会 藤原作弥委員
出席 176人

国際経済の大混乱に怒った天上の神は、人間世界の三人の指導者と呼ばつけ罰として「三日間でこの世を終わりにする」と通告した。

クリントン米大統領は早速、ホワイトハウスに国家安全保障会議を召集「一つの良いニュースと一つの悪いニュースがある」と報告した。一つは神が存在したというニュース。もう一つはこの世は滅亡するというニュース。江沢民・中国国家主席は全国人民代表大会を召集「二つの悪いニュースがある」と報告した。一つはこの世に神が存在したというニュース。もう一つはこの世は滅亡するというニュース。マハティール・マレーシア首相は国会を召集「二つの良いニュースがある」と報告した。一つは自分が世界の三大指導者選ばれたというニュース。もう一

つはアジア通貨危機はあと三日で終わるといふニュース。

通貨マフィアのパーティーでささやかなるようしたジョークをふんだんに織り込んだ語り口で大場理事長は、NIEES（韓国、台湾、シンガポール、香港、中国）とASEAN 諸国（タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア）の金融危機の実態と問題点を詳しく分析してみせた。題して「奇跡か神話か」。

昨年十二月以来、席の温まる暇なくアジア、ヨーロッパを飛び回り、前週韓国から帰国したばかりとあってホットな情報ばかり。

もちろん、締めくくりは日本経済への影響。「日本の景気回復宣言は二年早すぎ、景気後退宣言は二年間遅すぎる」という海外の批判を紹介する形で政府の奮起をうながし、アジア経済と日本経済の相互連関の悪循環を断ち切り、良循環へとギアを切り替えるには、日本の責任がきわめて重大であることを強調した。

時事通信社解説委員会顧問

藤原 作弥

羽田 孜 民政党代表 鹿野道彦 同党幹事長



羽田代表は、まず「農政畑、政治改革で常に一緒にやってきた」鹿野幹事長との息の合った連携ぶりを強調するとともに、クラブ会見初登板の鹿野氏への気遣いをみせた。

また羽田氏は、自民党脱党以来の行動を説明し、「改革の原点に戻って、何としても自民党に代わる政権交代可能な政治勢力の結集に全力をあげる」との決意を示した。このため「民政党」としては、統一会派「民友連」で参院選挙までに新・新党の結成を目指すという。

羽田、鹿野両氏は当面の野党結集の選択肢には①統一名簿方式②参院のみの新党結成③政党連合④日本版「オリーブの木」方式⑤新・新党結成——があるとしながらも、新党以外では「野党がバラバラの印象を与

えていては自民党に対抗できないし、衆参同日（ダブル）選挙に備えることもできない」と語った。

さらに鹿野氏は新・新党の理念、基本政策について「統一会派づくりから突っ込んだ話し合いをしており問題は無い」と断言するとともに、「首相候補となる」顔をだれにするかにすべてがかかってくる。これが決められなければダメだ」と言い切った。しかし、羽田、鹿野両氏は具体的な顔については「これからの話し合いだが、お互いに一歩引くことでなければ決まらない」と述べるにとどまり、言及を避けた。

それにしても最近の政治の閉そく感の深まりは尋常ではない。羽田、鹿野両氏が繰り返し指摘した「橋本内閣の相次ぐ失政」が明確になって



ク ラ ブ ゲ ス ト

も、政局は「株式市場に開け」（自民党幹部）という情けない状態だ。それは裏返せば「野党のだらしなさ」でもある。そのことについては両氏ともに「力不足を痛感している」とのことだが、明確な行動が伴わなければ国民の理解は得られない。

「これからどんどん街頭に出て、直接国民に訴える」（羽田氏）と言うが、どれだけ効果があるだろうか。そんな不信感とイラ立ちが、会場からの質問にもあふれていた。外交・安保、金融、景気対策、行財政改革などで



清水 宏保 スピードスケート選手

正直言って、息子と同じ年齢のこんな若いゲストに、これほど強い感銘を受けるとは思わなかった。

冬季オリンピック長野大会のスビ

の歯がゆさに「野党も同罪。その責任は重い」という怒りが質問に込められていた。どこまで深刻に受け止めてくれただろうか。どれだけ会員が集まるかも心配されたが、司会者としては「党名を間違えて失礼にならないように」と緊張してしまった。

毎日新聞社論説副委員長

岸井 成格

2・25（水）昼食会 司会 岸井 成格委員 小林静雄委員 出席 108人

ードスケートで金と銅の二つのメダルを獲得した清水宏保選手（三）は、満員の出席者を相手に大いに語り、会場を沸かせた。

日本という国は、政治・経済がうまくいかない時代にはスポーツ選手が活躍してくれる。今、政治の世界でも経済の世界でも、肝心な時に決断ができない人たちが多いが、清水選手たちは「五輪という最高の舞台」で実力を発揮した。

「その精神力の秘密は？」と質問したところ、納得できる答えが返って

我以外皆
我が師
平成10年2月25日
清水宏保

きた。清水選手は金メダルを確信して試合に臨んだのだ。

「攻めの気持ちで、自分のライブをやろうと思った。自分自身が君が代を聞くシーンの青写真も意識の中にあっただ」

「スラップスケートは、だれよりも早く使いこなせる自信があった」

緊張はしていたが、自分を信じてあわてず、開き直っていたのである。

長野五輪で金メダルを取った日本人選手の多くは母子家庭だった。自信を失いそうになっている日本のお父さんたちへのメッセージがあれば、と思いい、父親のことも尋ねた。

「厳しい父だった。まわりの人たちに対して礼儀正しく、と教えられた。父の優しさに気づいたのは高校二年

の時に父が亡くなってからです。父に頼ってしまっていたが、亡くなってからは、自分で信念を持って進んでいこうと思った」

日本オリンピック委員会（JOC）からの報奨金の使い道については、ニュースを準備してくれていた。

「金メダルは皆さんのおかげ。一部を地雷撲滅とパラリンピックへの協力に」

小柄で、弱々しい外見とは対照的に、本人はたくましく、強かった。ぜんそく持ちだが「肺に負荷を与え、肺を強くする」と自分の体のコントロールに努める。

控え室でコーチの平手則男さんが興味ある話をしてくれた。「昔は、選手は監督、コーチに任せっきりだったが、今は選手が何でもやる」

若い人を信じて、自主性を重んじた結果が今出てるのか、とも思う。

日本の将来は暗くない。

共同通信社編集委員兼論説委員

春名 幹男

2・25（水）記者会見 司会 小宮山洋子委員 春名幹男委員 出席 20人

ク ラ ブ ゲ ス ト

ヘイダール・アリエフ アゼルバイジャン大統領



ナゴルノカラバフ紛争で、アゼルバイジャンは米露両国を味方につけたアルメニアに押され続けた。アリエフ大統領は、石油資源を切り札にした巧みな外交で、不利な状況をはね返した。その政治手腕には、ワシントンも一目置いている。会見でも、

アリエフ大統領は旧ソ連圏では最長老の国家元首だろう。ブレジネフ政権下の一九六九年にアゼルバイジャン共産党第一書記に就任し、ソ連共産党政治局員に上りつめたのは、アンドロポフ時代の八二年だった。経歴からいえば、エリツィン大統領よりずっと先輩である。

大物を迎えての会見は、残念ながら尻切れトンボの感じが残った。大統領の会場到着が遅れたうえ、冒頭スピーチが長々と続いたので、質疑応答がわずか三問で時間切れとなっていました。

とはいえ、大統領の話の内容は明快で、言葉の端々にクレムリン仕込みの老練な政治感覚をのぞかせた。

「米露仏からなるOSCE（欧州安保協力機構）の調停グループの姿勢は公平であり、和平に向けての原則と方向はすでに打ち出されている」と述べ、今後自信をみせた。大統領によれば、四日間の東京滞在中にこなした会談は三十八にのぼった。その大半が、石油開発がらみの商談だったという。欧米に大きく出遅れたとはいえ、日本のエネルギー業界がアゼルバイジャンにむけるまなざしの熱さがうかがえる。

毎日新聞社論説委員

河野 健一

2・27（金）記者会見 司会 長谷川和明理事 通訳 米原万里 出席 169人

□ 会議報告 □

第119回施設運営委員会

(2・5 宴会場)

設計図面をもとに、今夏予定のクラブ施設のリノベーションについて現段階での動きを事務局から報告、ラウンジの一部模様替えを決めた。

また、貸室の利用促進を図るために、「宴会割引」として①一人単価三千円以上の飲食を伴う場合の貸室料金を一五%引き下げる、②土曜日の貸室料を一律一五%引き下げること、を決定、理事会に上申することにした。

出席 石川委員長、池田、宮川、山田、佐藤、田村の各委員。

第189回会報委員会

(2・9 小会議室)

二月号について意見交換した後、三月号の編集を協議した。また、前回に続いて、新企画などについて検討、四月号から「会員の著書」欄を拡充することを決定した。

出席 住田委員長、田村、和田、大空、伊波、埜邑の各委員。

第246回会員資格委員会

(2・17 小会議室)

三月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 斎田委員長、小田、北村、小谷、船田、玉川の各委員。

第264回企画委員会

(2・17 宴会場)

ゲストの選考について協議したほか、五月の総会記念講演の講師候補を選定した。

出席 神塚委員長、住川、宝利、島田、小林、宇治、春名、小宮山、羽生、川戸、菱山、和田、森、饗庭の各委員。

第69回総務委員会

(2・23 大会議室)

昨年末、ワシントンのナショナル・プレスクラブを訪問してきた那部専務理事が視察報告を行い、会員制度や貸室の利用促進、会見の活性化など今後のクラブの在り方について意見を交換した。

出席 杉田委員長、住田、斎田、田村(泰)、石川、浅野の各委員。加藤理事長、那部専務理事。

書いた話 書かなかった話

四・一七ストの周辺



江本嘉幸

知恵者の太田はそれらを見守りながら、十五日からラジオで収拾策を明確に示し、政府にアピールしていた。「政府は法律の建前（公共部門の賃金は民間との間に格差があればそれが是正しなければならない）に弱い。そこが折衝のポイントだ」。

太田氏はそう強調していたが、この会談は、公共部門の賃金は「民間に準拠」という民間準拠の原則を確立した会談でもあった。

四・一七ストを前に、共産党が唐突に、まさに唐突に、スト破壊の行動にでた。四月八日には公然と反対を表明（四・八声明）した。ストは「挑発者、分裂主義者、修正主義者の策謀に（同党系組合員を）さらす」危険があるというのである（ストの規模はその五、六年後にはエスカレートしたので、それに比べれば小さなものだった

が）。多くの現場で、共産党の指令で同党系組合員は、スト阻止の行動を起こした。

いまなお、解けないのは、なぜ、共産党は四・一七ストを破壊しようとしたのである。スト延期の後も「四・一七ストは国際自由労連につながる宝樹、笠原藤太郎（全電通・NTT）一派による陰謀」と名指して非難、違法ストに対して当局は参加者を処分するが、その処分で共産党系組合員を職場から排除しようとしたのだ、ということである。二人が名指しされたのは総評主流派内で社会党の構造改革論への同調者だったからだろう。だが、それが、四・一七ストと共産党系の排除とどう結びつくのだろう。共産党のスト阻止行動で、国労では共産党系組合員が除名三十一人、権利停止百四十八人の統制処分になり、全電通（NTT）ではそれぞれ百九人、二百人の大量処分をだした。スト阻止の行動は、結果として統制処分になるのは当然予想しうることだ。

三十数年も前の話になると、いろんな変化を今に翻訳して説明しなければならぬ。厄介で煩わしい。比較的それらを選けるテーマを選び、きょうは、書かなかったのではなく、なお、真相がわからずに書けない話を書いてみた。

公労協。ワープロで「こうろくきょう」と打てばすぐでるほど、知名度があつたが、いまは存在しない。JR、NTTなど公共現業部門の労組協議会である。一時期、労働組合ではリーダー格であつた。その公労協が核になって64春闘は四月十七日に「ゼネスト」を予定していた。全通の宝樹文彦氏は、

二・一スト（一九四七年）の再現を試みたと言っているが、春闘がスケジュール闘争化し、マンネリになったので、そんな春闘をつぶそうとしたというのが本音だった。スト前日の十六日午前、首相・池田勇人と総評議長・太田薫両氏とのトップ会談で収拾の合意ができ、ストは延期された。国労はその前夜、スト回避を決めていたが、これは、総評事務局長・岩井章氏や国労出身の参議院議員・野々山一三氏らと政府筋との裏折衝で、政府・与党にストに屈した形での収拾に反発がつよいのを知り、それを配慮してのことだった。

当時、労働組合には「ライシャワー（アメリカ駐日大使）路線」が浸透しているとか、えたいのしれないデマ情報が流れていたが、その種の情報は珍しくない。共産党中央がそれらの情報に迷わされていたとは思えない。そう思っていたとすれば被害妄想でしかない。結果は党員を苦しめ致命的なダメージを与えることになった。この真相は未だ説明されていないし、寡聞にして共産党がその責任をはっきりさせたとは聞いていない。

四・一七ストは公共部門と民間との賃金格差をうめることがテーマだった。とくに国鉄に不満がよかった。国鉄総裁・石田礼助氏はこれに関連して「危険な仕事をしている国鉄とタバコ巻き（ＪＴ）と一緒にされては困る」と言っていた。国鉄一家など、公共部門の労使には一家意識のつよいことは常識で、石田の発言もその一つ。ＪＴにはかなり刺激的だったろう。政府や世論の動向に対してそ

れぞれの当局が政治的に動くことは珍しくない。

七五年のスト権ストでも、国鉄では各地方鉄道管理局の総務部長会議が圧倒的多数で、公共企業体へのスト権承認を条件つきで認めた。そのころの世論からみれば、国労には有力なバックアップであった。

スト権スト後、富塚三夫氏（国労書記長）は「あれだけ、時間をかけて積み上げたものが一挙にゼロになった。川野（政史・国鉄職員局長）さんも「大丈夫」と言っていたのに……」と首をかしげて、何度も話していた。

川野氏にしても、総務部長らにしても、国鉄の労使関係を正常化するには交渉の当事者（当局）に賃金などを決めうる能力（当事者能力）をもたせ、自主性をもって組合と対等にわたりあわせた方がいい、と考へてのことだったに違いない。単に、一家意識からだけのバックアップではなかつたらうが、それはそれとして、一家には

ハタからはうかがいぬ情緒があつた。

数多い紛争を類型化することはできないが、なかには紛争の着地点がはっきり読み、それが読んだ形でおさまる紛争も少なくない。その背景にはこうした情感、あるいは信頼関係が労使に働いていたとしか思われない。

疑問なのは、うちにそんな情感を秘めながら、日本の労働組合はつねに「左側通行」を原則としてきたことである。これは労働界の長老、細谷松太氏がよく言っていたことだ。早い話が、ここで例にあげた国労がなよりのあかしである。節目、節目でつねに左へ左へとカジをとって、なお、労働組合で主座を占めてきた。

細谷氏は「経営体質の前近代性がそうさせる」のだと解説していたが、これはちよつと公式的すぎる。

戦後、労働法制も整備され、国民所得も世界のトップの仲間入りをした。なのに、どちらかといえ

ば、教条的な左派が組織が分裂しても多数派であり続けた。GHQで労働担当のチーフだったコーエンは、日本の労組幹部の話を書きながら、日本人に「左翼メンタリテイ」がつよいのに驚いた、と述懐している。この表現が適切と思える雰囲気がつねにあつた。

戦前、戦後の労働環境、敗戦直後の状況と価値観の転換などで、コーエンの表現は説明をしようとするれば説明はつくが、総評の左旋回をはじめ、その後も左翼メンタリテイは根強い。ウォルフレンのいうように、政治風土に市民を幸福にしないシステムがあるゆえか。

えもと よしゆき会員 一九三一年福岡県生まれ 早稲田大学卒 五三年産経新聞入社 政治部 社会部記者を経て サイゴン支局長 論説委員などを務める 八八年退社後 日本労働協会（研究機構）理事 東京都地方労働委員会公益委員などを務めた

書いた話 書かなかつた話

ワーキング

プレス

大会六日目(二月十二日)、白馬は朝から雨。長野オリンピックのアルペン競技の開幕を飾るはずだった男子滑降競技は悪天候のため、これ度三度目のキャンセルとなった。男子滑降は当初、開会式の翌日に予定されていたが、三日連続の雪で十一日に繰り延べされ、さらに十二日に延期。四日間も待たされていた。

滑降競技のコース整備には、地元関係者のほか、自衛隊を含めて千五百人を超える人たちの協力がいる。降りしきる雪の中、競技の行われる前夜から開始直前まで続くコースの整備作業は、三回も徒労に終わってしまったのだ。

われわれ国際信号制作のORTOスタッフ(ORTO=オリンピック放送機構。大会組織委員会の一部局で世界の放送局のためにテレビ・ラジオの信号を制作する。滑降競技はNHKが担当)にとっても、三回の仕切り直しは大いに気もめた。三十台のカメラ、九台のVTR、七十七本のマイク・フォンに総勢百四十五人は、いつ始まるかもしれない競技をひたすら待った。

冬の競技の中継映像制作は、もと

五輪放送機構

悪天候に泣かされた滑降中継

▶ 石 神 卓 朗
(日本放送協会)

もど費用がかさむ。しかし、ここまで天気に影響される競技であるとは、想像以上であった。雪の斜面にカメラ台を建て、雪中に土管を埋め、その中にケーブルを通す。百四十五人の人件費と宿泊費、それに機材の減価償却費を入れると、一日でざっと一千四百万円の経費がかかっている。三度スタンバイして一回も放送にならないスタッフのいらだちは、ピークに達した。

大会七日目、その気持ちを晴らすような青空が、白馬山ろくに広がっ

たのは予定より五日遅れの二月十三日だった。この素晴らしい天気で、スピード感あふれる、迫力ある映像を世界へ伝えられると、満を持してスタッフは競技の開始を待った。

白馬の滑降コースは問題となった国立公園内の標高一七六五メートルをスタートして八四〇メートルまでの全長三二八〇メートル。長さ、標高差ともタフなコースである。世界のトップ選手の滑走時間を一分五十秒前後と予想したわれわれは、FIS(国際スキー連盟)に対して、シード選手三十人のスタート間隔を少なくとも二分十五秒にしてほしいと申し入れていた。晴天の気象条件であれば、FISも文句は言うまいと思っていた。ところが、またしてもすんなりとはいつてくれない。今度は風である。競技開始が一時間近く遅れたうえに、スタート間隔も二分と決まった。たった十五秒の短縮ではあるが、われわれにとっては、これは大きな問題である。

例えば、一分五十三秒でA選手がフィニッシュした場合、次の選手へのスタートまでわずかに七秒である。この七秒間で世界各局のアナウンサ

ーがA選手の滑りをまとめるにはあまりにも時間が少ない。レース後の選手の表情を伝えるにも、十数秒は必要である。結局、スタート映像を十五秒遅らしてVTRで出し、途中から生映像に戻るといった映像構成にした。平均時速が一〇〇キロメートルを超える滑降競技は、わずかに十五秒でも四〇〇メートル以上滑ってしまふ。途中省略された部分にはカメラ三台、マイク・フォン十本、それにスタッフ五人が配置されていた。五日間待たされた彼らは、力を発揮する機会も失った。

放送権料に三億七千五百万ドルを投じたアメリカCBSは、生放送できずだったアルペン競技が、度重なる延期で影響を受けて視聴率が低迷し、スポンサーへの返金を余儀なくされているという。

メダリストの陰で、力を出し切れず涙する選手の顔が見られた。テレビ中継の裏側でも、同じような悔しさがあった。

いしがみ たくろう氏 一九七六年入局 八三年からスポーツ報道センター・ディレクター ソウル五輪からオリンピック担当 冬季はリレハンメルに続いて二回目

今年一月二十五日、当時の自由
党副党首、西岡武夫氏（六）が地
元長崎市市内での記者会見で、任期
満了に伴う長崎県知事選に立候補
を表明、全国の注目を集めること
になった。同氏は新進党が解散を
決めた昨年十二月二十七日、「新党
結成に全力をあげる」として、「現
段階」との注釈付きで知事選立候
補の断念を表明。それが告示十一
日前、一転しての立候補表明。選
挙構図は、前自民党衆院議員の金
子原二郎（五三）、西岡両氏を含め四
人の新人の激突。しかし、争点で
際立ったものではなく、両氏の対決
が注目の的だった。

取材面では、西岡氏の言動
に振り回されたきらいがある。端
的にいうと、発言の真意がよく分
からないという点につきる。昨年
六月に現職知事が任期限りの引退
を表明後、西岡氏は知事選に関し
てさまざまな発言をしてきた。例
えば「候補者を必ず立てる。立て
られない時は最終的に私が責任を
持つ」「責任を持つ」の真意を尋
ねても「それ以上でも、以下でも
ない」といった禅問答的な答え。

——長崎県知事選——

西岡氏の言動に
振り回された半年余

▶ 黒 岩 哲 三
(長崎新聞社)

政治家の発言は、表面的には明
確に聞こえるが、実態や真意は不
明確な場合が少なくない。西岡氏
の発言もその例に漏れなかった。
結局、「責任を持つ」という言葉
が、後援会が西岡氏に立候補を迫
る根拠になった。後援会のこんな
危機感も立候補の背景にあった。
「新進党が解散後、小規模の自由
党では次の衆院選の当選は難しく
なる。自民出身の知事が誕生すれ
ば状況は一段と厳しくなる」
立候補を決断した西岡氏だが、

陣営の内実は厳しいものがあつ
た。「西岡党」と呼ばれる後援会は
高齢化が目立ち、機動力や集票力
に欠けた。

七十七歳の選対長が決まったの
が告示二日前。選挙公報の原稿書
きやパンフレットの文言内容を西
岡氏自身が不眠不休でやりくり
し、選挙期間中も事実上の選対長
として疲れた体で夜遅くまで戦略
の組み立てに追われるというあんな
ばい。準備不足と出遅れの弊害が
如実に表れていた。

一方、金子氏は農業、漁業、商
業などの各団体や労働団体など約
三千二百の団体から推薦、支持を
取り付け、分厚い組織力を生かし
た選挙戦を展開。加えて、同氏の
知事選立候補に伴う衆院長崎4区
の補欠選挙が同日選となったこと
もあり、自民党が「党営選挙」
的態勢で同氏を支援、橋本首
相や加藤幹事長はじめ多数の
自民国会議員らが長崎入り、
推薦・支持団体の引き締めを
徹底した。

そして、二月二十二日の投
票。西岡氏は金子氏に十一万

票の大差をつけられ敗北。今回の
知事選では、現職衆院議員が立候
補したことに伴い、二つの小選挙
区で補欠選挙が実施されるせわし
さを実感。地元新聞として連日、
選挙報道で紙面を飾る一方で、有
権者の選挙疲れが懸念される。

西岡氏の知事選立候補に伴う三
月三日告示の衆院長崎1区補選
で、同氏は同月一日、長崎市内で
記者会見、「補選には立候補しない
が、衆院解散による総選挙では1
区で自由党から立候補する」と国
政の場に再び戻る意思を示した。
同氏の動向は今後も目が離せない
というのが今の心境だ。

くろいわ てつぞう氏一九八〇年入社 江
迎 謙早両支局長などを経て 九七年から
長崎県政担当キャップ



テレビの「金子候補当選」の報を見
つめる西岡候補(2.22)=長崎新聞

ワーキング
プレス

「来いっっちゃ佐渡へ」。このかけ声もむなく、昨年の佐渡観光の入り込み客が九十五万三千人と百万人を割った。海に囲まれ、魚も豊富、酒もおいしい、自然豊かな観光地佐渡にとって、八年続いていた観光客百万人割れはショックだった。一時期は百三十万人を記録し、大いに盛り上がっただけになおのこと。迎え入れる観光業者はもちろん、島内三十七軒のホテル、旅館などは一様に困った、困ったと顔を曇らせ、悲痛の声が島内を駆けめぐった。

当然、佐渡観光の盛り返しの方策が随所で行われた。その中でピカリと光るのが「佐渡金銀山を世界遺産に登録」。徳川幕府三百年の財政を支えた相川金銀山を筆頭に鶴子銀山(佐和田町)、西三川砂金山(真野町)など島内には十数カ所の採掘場所が散らばっている。これらの遺産・遺跡は世界的意義が十分あり、観光には欠かせない材料、放っておく手はないと早速、二〇〇〇年の世界遺産登録に向かって市民グループ「世界文化遺産を考える会」が発足、運動が進め

られている。

「世界遺産」は国際的な文化、自然遺産を破壊から守るため一九七二年のユネスコ総会で保護に関する条約が採択された。これに基づいて各国政府が推薦、ユネスコ世界遺産委員会が「世界遺産一覧表」に記載するかどうかを審査する。

列島報告

—新潟・佐渡—

金銀山 世界遺産に登録を

佐藤 雅之

(新潟日报社佐渡支局長)

録への具体的な日程などを話し合い、運動を繰り広げている。地元自治体も動きだし、検討委員会を設置、遺跡発掘などを行い、具体的計画の骨子を固めて、新潟県が国へ働きかけをスムーズにできるように下地作りを目指している。今後の問題は市民への盛り上げ。

「世界遺産ってなに？」「世界遺産と観光がどう結びつく？」。低所にも目を向け、巻き込む必要性がある。これが起爆剤になることは絶対間違いないからだ。

幸い？にして「百万人割れ」が危機感と呼んだのか、世

日本ではすでに姫路城など文化遺産六件、屋久島など自然遺産二件が一覧表に記載されている。日本では世界遺産に推薦されるためには候補地として、国の「一覧表」に登録されなければならない。「考える会」は世界遺産登録への候補遺跡リストを発表し、遺産登

界遺産登録を後押しするかのようになり、低迷する佐渡観光に再び光をと、JR東日本新潟支社が佐渡を丸ごとテーマパークにする大胆な構想を打ち出した。都会の人をターゲットに村祭りなどいろんな参加体験を通じて島民と触れ合い、地域の活性化に

役立てるのが狙いである。

さらに佐渡観光協会が三月十日を、ごろ合わせて「佐渡の日」に決め、四日間、宿泊料金一泊三千百円、佐渡金山など観光施設の入場料を三百十円に統一して大サーピスすると打ってでた。

佐渡支局では月曜から金曜まで毎日、地域版を発行している。その中で、佐渡観光の見直しは企画連載などで対応した。新年には「百万人の虚像・きしむ観光の島」、通年企画で週一回「島の旬便り——つくる・とる・たべる」もスタート、「しおかせ観光の島98」のワッペン付きで突っ込んだ紙面に仕上げている。

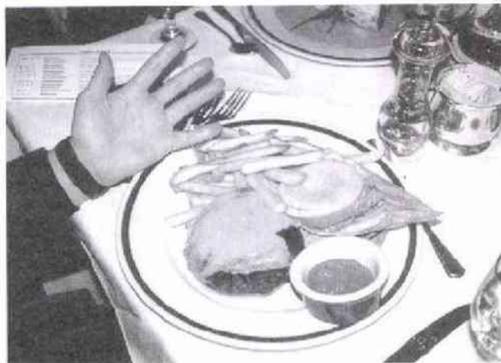
(さとう・まさゆき)



佐渡観光に新風を吹き込むか
——佐渡金山遺跡

ワシントン NPCリポート (中)

その日、利用者は十数人。一人当たり千円程度取られても、文句は言えまい。ブルーム総支配人は「年間四、五百万円の費用しかかかっていない。会員は、朝早くから記者会見に出たり、取材活動をしている。割の合わないサービスとは思わない」と太っ腹だった。



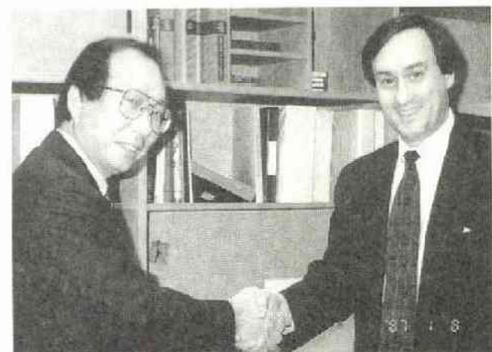
手のひらサイズのハンバーガーが6ドル安さとボリューム感で勝負

朝の記者会見である『モーニング・ニューズメーカー』は、七三年から始まった。当初は朝食会と呼ばれ、軽食が用意された。いつのころか、飲み物だけになり、現在は何も出されていない。その代わりでもなからうが、十三階レストラン『第四権力ラウンジ』では、朝食の無料提供があった。もちろん、恩恵にあずかるのは会員だけ。非会員は有料だそうだが、いくらなのかは聞き忘れた。我々も一回だけ、ご馳走になった。飲み物に各種のパン、果物などがビュッフェ形式に並んでいた。焼きたてのパンがおいしかった。

十四階の会員専用レストランでランチを食べれば約八百円でおかわり自由。夜の食事も十三階レストランで食べた魚料理のマヒマヒ(シーラ)がおいしかった。ステーキは食べきれないほど大きく、赤ワインを一本つけて三人でほぼ一万円(チップ込み)と安かった。なぜこんなサービスが可能なのか。すでに書いたが秘密は、クラブとは無関係に行われている千八百回にも及ぶ記者会見(勉強会、セミナーを含む)にあった。飲食のケータ

財政支える“外売り”収益

リングと部屋貸して莫大な収益を上げていた。部屋は優先的に一般貸し出しをする。その「あがり」で会員サービスを行っているのだ。NPCの年間の総収入は十億円余。このうち「外売り」による収入が約六〇％の五億二千万円から六億五千万円にのぼる。さらに会員名簿の広告料やレストランの売り上げ、図書館にまた貸ししている家賃収入などが約二〇％。会費収入は二〇％にも満たない一億六千万円。そして、何と云っても、テナント料が年間わずか一ドルという破格の安さであったことだ。当クラブはどうか。総収入は約四億円余。もちろん、会員が関与しない一般への「外売り」はゼロ。会員利用の部屋貸しと飲食代が五千六百万円で約一五％。残り八五％が会費収入だ。そのうえ、テナント料は全収入の四五％にもなる。つまり全くの逆転現象なのだ。もちろん、日米を単純比較することはできない。創立とその生い



ジョン・ブルーム総支配人(右) ホテル業から5年前に転身。49歳

立ちがまるで違うからだ。事業収益でクラブ財政を支えていることを自慢するブルーム総支配人は、こう断言する。「クラブは記者会見の場を提供する。内容のよしあしは、出席した会員が判断すればいい」。だから、NPC主催の昼食会で、チケットの売り上げが悪ければ即座に中止してしまう。たとえば、ゲストが他国からの賓客であっても、なのだ。サモン会長は「質を落としてまで、国際儀礼を果たす義務はない」とまで言い切った。両クラブの「哲学」の違いは、あまりにも大きい。(那部 吉正)

□一九九八年一月二十六日(月)□

スペース「コロンビア」クルー記者会見から シャトル

黒岩徹(毎日) スコットさんと土井さんにお聞きしたい。船外活動のときにどういう危険があったのか、また、そういう危険に対してどのような準備をされたのか。

ウインストン・スコット 最初の船外活動でスパルタン衛星を捕まえるときには、特にいくつかのことを心配しました。第一義的には、スパルタンの回転率。それから角度。どういう角度で捕えることになるのかが問題でした。また、軌道上の高度も心配でした。成功した後は、衛星の方向性を心配しました。

我々は、衛星を動かすことはあまり心配しませんでした。重量が一・五トンもありましたが、質量がそれだけあっても、動かすことについては不安はありませんでした。

スパルタンとスペースシャトル双方のコーディネーションも非常に重要でした。同じ方向で、しかも同じスピードで動くことが大事でした。

その準備のために、地上からいろいろな助力を得ました。船外活動を訓練するためのプールがありまして、模擬衛星を使って捕獲する練習

をしました。それからパーチャル・リアリティー実験室というのもあり、そこで同じような手順をやってもらって、ああだった、こうだったということを送ってもらったわけです。それから、水中で模擬衛星を捕まえる姿をビデオで撮って送ってもらいました。また、軌道上のスペースシャトル内でも、小型の模型で同じことをやってみたりもしました。

まとめていいますと、我々自身は準備のために、そういうあらゆることをやったということです。

土井隆雄 さらに危険というわけではないのですが、船外活動の時間の問題がありました。船外活動は、六時間から八時間くらいと限られています。ですから、その間に自分の定められた仕事をしなければなりません。そういうわけで、私たちは地上で、また水中で非常に激しいトレーニングをつみました。一回六時間の水中トレーニングを、全体で八十時間くらい繰り返しました。そういうトレーニングによって、宇宙へ出たときに、効率よく失敗せずに、一度のチャン

スで多くの仕事をする事ができたわけです。

村野賢哉(NHKOB) 土井さんは、早稲田大学の天文同好会に属していたこともあり、天文愛好家として古い経歴を持っていらっしゃる。これまでは地球上から宇宙を眺めていたわけですが、今度は、地球を回る一つの星の上から宇宙を眺めた。少し座標軸が変わったわけですが、ミッションスペシャリストとして宇宙を見た感想をうかがいたい。

土井 宇宙に行きますと、まず初めに、地球も一つの星になります。ですから、まず地球を眺めて、その美しさに非常に感動しました。

宇宙から見ると星は地上と違って、南北という方向がはっきりしません。というのは、スペースシャトルがいろいろな姿勢で地球を回っていますから、窓から外をのぞいたときに、どちらが北か東か最初がよく分かりませんでした。地上では、私は外に出て星空を見上げて、数秒のうちの方角が分かりますし、星座もほとんどすべて分かります。スペースシャトルから眺めたときは、今自分がどの星座を見ていて、どの方向を見ているかが分かるまで、少し時間がかかりました。

またスペースシャトルの軌道は、北半球と南半球を行ったり来たりしています。ですから、北半球と南半球の両方の星座を見ることができ

ます。私自身初めて南十字星を見ましたし、大マゼラン星雲、小マゼラン星雲といった日本から見えないような南の星座を見ることができて本当に感動しました。

村野 クレーゲル船長はじめ皆さん、将来宇宙ステーションにお乗りになると思いますが、そういう立場から、宇宙文明論のようなものを話していただきたい。

というのは、皆さんのクルーもいろんな民族の共同作業であつたわけです。つまり、地球上のそれぞれの国とか民族とか文化とか、あるいは歴史や宗教を引きずって宇宙に出たわけです。将来、宇宙ステーションに人間が住むことを考えた場合に、人類の共同の文化を築くのであれば、宇宙に住むのは大変危険なことだと私は思っているのですが。

国境も紛争も見えない聖なる惑星

ケビン・クレーゲル まず私のほうからお答えしましょう。我々の乗員が、いかに多種多様な背景を持っているかということ。一見するだけで、背景が違うことは分かりますね。七つの異なった言語が飛び交っているようなクルーなわけです。

ところが、なぜ宇宙が美しいかといいますと、我々が宇宙に出掛けていきますと、一つの言葉

しか話さないのです。それは一つのチームだということなのです。我々はアメリカ人でもなければ、日本人でもなければ、ウクライナ人でもないのです。我々はSTS-87 (Space Transportation System-87)のクルーなんだということなのです。チームとして、ミッションを達成することが我々の存在なのです。

宇宙に行った飛行士が帰還すると、いかに地球という惑星がきれいだったかということになります。アメリカだろうが、カナダだろうが、メキシコだろうが、国境がどこだということなどは、もう分からないと言います。たとえば、クロアチアとボスニアとセルビアの違いは宇宙からは分かりません。そこで戦いが起こっているなんて見えないのです。アフリカでもインドのタミールでも、そこで紛争が起こっているなんて、宇宙からは見えない。宇宙から見ますと、そんなことは大事なことは思われなくなるのです。

他のクルーたちともよく言うのです。世界の指導者の会議は、ジュネーブとかパリでやるのではなくて、なんとか彼らをスペースシャトルに乗せて宇宙ステーションまで連れていって、そこで会議をやったらどうか、と。そうすれば、リーダーたちが到達する結論も、全く違うものになるだろうと思います。

ですから、私は宇宙を探検することによって、人間はより近い存在になれると思うのです。そ

れこそが、ただ単に、宇宙に対する知識を得ること以上のものである、と思います。

カルパナ・チャウラ 実は、アメリカでも同じような質問を受けました。私はそれに対して、ヒマラヤ山脈がどんなに素晴らしい光景だったかを話しました。宇宙から見ますと、ガンジス川もすぐ分かります。質問した人は「宇宙から見てガンジス川は聖なる川に見えましたか」と聞きました。私はこう言いました。「あんなに高いところから見ていると、ある意味では地球そのものが聖なる惑星のように見えました」。

宇宙に行つてそして戻ってきました。一生懸命、そのために努力をして仕事をしました。ですので、紛争とか争いとか、小さなことは忘れるべきだと思います。地球は小さい惑星なんです。地球を周回するのに、たった一時間半しかかからないのです。そして、生命のきずなである大気は、本当に小さな小さなリボンのようにしか見えないのです。

そういうことを考えますと、なぜわざわざ時間をかけてあんな戦いをしなければならぬのか。本当の意味での命、生物があるのは地球だけなのです。我々は幸運だと思ふべきでしょう。

ヤロスラフ・プストヴィ 私は、このクルーの方々とは一年以上つきあひまして、家族のようになりました。これはいいモデルだと思います。



「ミッション全体に目を配り、クルーを安全に地球に帰還させることが責務でした」

ケビン・クレイゲル
船長 NASA 宇宙飛行士
米ニューヨーク州生まれ 41歳 3回目の搭乗 船長としては初



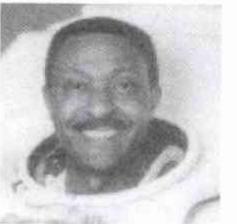
「NASAの訓練で土井さんと同級生。シャトルの操縦を担当しました」

スティーブン・リンゼイ
パイロット NASA 宇宙飛行士
米カリフォルニア州生まれ 37歳 初飛行



「ロボットアームの操作を主に担当、科学実験も行いました」

カルパナ・チャウラ
ミッションスペシャリスト (搭乗運用技術者)
NASA 宇宙飛行士
インド生まれ 36歳 初飛行



「2回の船外活動を行ったほか、パイロットの補佐もしました」

ウィンストン・スコット
ミッションスペシャリスト
NASA 宇宙飛行士
米フロリダ州生まれ 47歳 96年若田光一さんとともに初飛行 今回が2回目

す。地球上の人間関係の本当によいモデルになると思うのです。

太陽系だけを見ても、いろいろな惑星があります。巨大なスペースというのがあるわけですから、我々がこれから学ばなければならぬのは、宇宙でどうやって生きていくのか、宇宙にどうやって住めるのかということの研究することです。地球というのは、生命の始まりだけではありません。もし人類がすべての力を結集して、共同で宇宙を探索していけば、どのような紛争も結局はなくなると私は思うのです。

わが国はその第一歩として有人宇宙探査に乗り出しています。我々は宇宙でどうやって生きていくのか、どうやって住めるのか、そうした探査活動を共同でやっていく、そこそが我々の生存に至る唯一の道だと思えます。

宇宙では「個人」だけがみえてくる

スコット 地球にはたくさん人間が住んでおりますし、たくさん国があります。宇宙は、

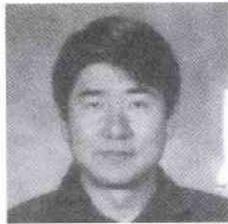
こういった異なる人々が結束する場になるべきだと思います。

もうすでに他のクルーが雄弁に語りましたので、つけ加えることはないかもしれませんが、いつも驚くことがあるのです。それは団結です。それぞれの違いを捨てて、宇宙で飛行するというチャレンジのために団結することに、いつも私は驚くのです。これはさ細なことではないのです。大変なことなのです。

お互いによく知らないときには、お互いの違いばかりが目につくでしょう。しかし宇宙に飛んだ後は、土井さんは日本人の土井さんということではなく、単なる土井さんという個人が見えてくる。チャウラさんもインドで生まれたチャウラさんではなく、単にチャウラさんという個人が見えてくるわけです。カデニウクスさんもそうです。皆さんも同じだと思います。私についても、アフリカ系のアメリカ人であるといふことはすべて捨てて、単にウィンストン・スコットという人間だ、というふうに分かってくれたと思います。

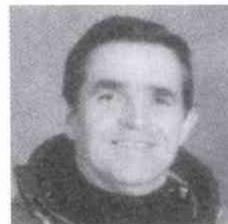
ですから、宇宙に行きますと、小さな違いというのはみんな忘れ去られてしまうのです。一緒に訓練を受けるわけですし、家族のようなものになるのです。一緒に暮らし、仕事をし、そしていろいろな問題を乗り越えるわけです。そうしますと、小さな小さな違いは、どんどんどんどん消えていく、そして、みんな人間として本来の姿に戻って生活するという形になるでしょう。

ステイブン・リンゼイ 将来のことをちょっと考えてみたいと思います。国際宇宙ステーションを作ることになっていますが、宇宙飛行士というのは、いろいろな背景を持っています。いろいろな国の出身者がいます。しかし、我々には多国籍とは考えません。我々の、あるいは皆さん方の宇宙ステーションだと考えているのです。どこの国のかは考えません。会話、物の考え方が違う、というようなことは考えません。このミッションに関しまして、七年前に、たとえば私がウクライナの人と飛べ、と言われた



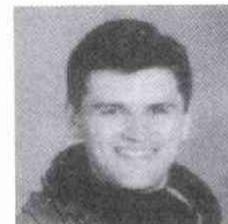
「2回も船外活動ができた、幸運でした」

土井隆雄 ミッションスペシャリスト 宇宙開発事業団有人宇宙活動推進室搭乗部員 東京都生まれ 43歳 初飛行 日本人として初の船外活動を行った



「ウクライナと米国の共同実験を担当しました」

レオニド・カデニューク ベイロードスペシャリスト(搭乗科学技術者) ウクライナ国立科学アカデミー宇宙飛行士 ウクライナ生まれ 46歳 初飛行



「今回は地上でバックアップでしたが、今度は地球が本当に丸いのか、自分の目で確かめたい」

ヤロスラフ・ブストヴォイ バックアップ・ベイロードスペシャリスト ウクライナ国立科学アカデミー宇宙飛行士 ロシア生まれ 27歳



「国際宇宙ステーション建設のための情報を十分に得ることができました」

グレンダ・ロウズ 船外活動訓練・運用エンジニア United Space Alliance職員 米カンザス州生まれ 36歳

土井 宇宙に出て地球を見つめて一番最初に感じたのは、私がいわゆる日本の代表というよりはむしろ、地球からきた地球人であるという意識でした。
さらにもうひとつ。宇宙に住むことにおいて、新しい発想や技術、また文化といったものが出てくると思います。
今回の私たちのフライトは十六日間でした。

新しい宇宙文明の創造に向けて

ならば、そんなことは絶対に起こらないと言ったと思います。なぜなら、七年前は冷戦でして、東と西の極がありました。しかし、今ではもう友人になっていくわけです。いろんな人と仕事をして分かったのですが、お互いにきちんと知り合えば、基本的には皆同じだということなんです。宇宙に行けば、目標も同じです。我々はそういうチャンスと一緒に協力をし、そして一つのゴールに目標を絞るわけです。違いに目をやっていく暇はないのです。

その短い間でも、私自身たとえば、今着ているような服は、宇宙ではあまりスマートに見えないと思っただけです。また、宇宙ではいすもいらない。普通のテーブルもなにかおかしい。きっと家具も全然違ったものになるでしょう。またスポーツ。私たちはサッカーボールの風船を持っていったて試しましたが、きつと地上とは全く違うものになると思います。
ですから、宇宙に住むことによって、私たちは今まで考えたこともなかったような新しい生き方や住み方、スポーツといったものが必ずや出てくるのに違いないと実感しました。それは言ってみれば、宇宙での新しい文化の創造につながると思います。もっともっと多くの人たちが宇宙に行くことによって、新しい文化を生み出すでしょう。それがまた科学技術と結びついて、新しい宇宙文明といったものを人間が創り出す。そういう可能性を私たち人間は持っている、このミッションで感じました。

北村文夫(読売OB) 上院議員のジョン・グレン元宇宙飛行士が、再びスペースミッションに参加することが決まったとの報道があります。しかし、彼の参加は、NASAに対する関心を盛り上げるための決定ではないかという議論もあります。これについてクレイゲル船長のコメントをいただきたい。
それからグレン議員が参加する場合には、どのようなミッションを分担させるのがよろしいのでしょうか。
クレイゲル グレン議員には、二年前も去年もお目にかかりましたが、「飛びたい」と言っていました。
我々も、またNASAの人間だったら、だれでもグレンさんと飛びたいと思っています。この方は、国家的な英雄です。そして地球の軌道を回った最初の飛行士の中の一人でありました。彼が昔経験したことに対して持っている洞察力が、近代的なシャトルで飛んでいる我々への懸念

け橋になると思うのです。それはだれもがワクワクすることです。

さらに、多くの人々が宇宙飛行というのは若者だけのことだと考えていると思います。しかし、彼が搭乗することで、ずいぶん年齢制限が広がったのではないのでしょうか。

グレン上院議員の具体的なミッションは、おそらく、人体に対するスタディをするということだろうと思います。我々もボランティアとして血液サンプルを出したり、いろいろなサンプルを提供するわけです。そして、微小重力が我々の人体にどう影響するかをみるわけです。ですから、年長者にどう影響がでるのかをみることになるのではないかと思います。

あのミッションは六人の宇宙飛行士を乗せることになっております。ですから、グレンさんが乗ることで、だれか他の宇宙飛行士の席がなくなるということではありません。彼が加わることによって、ずいぶん中身が豊かになると思います。すでに宇宙飛行するということだけで、エキサイティングなわけですが、グレンさんが飛ぶということ、さらに刺激的なものになるでしょう。

それから、私の二回目の飛行のバックアップだったペドロ・ドワークさんも乗ることになっています。彼は、グレン上院議員が飛んだときには生まれてもいなかった人です。そういう人が一緒に乗るといことは、素晴らしいことで

はありませんか。宇宙の歴史そのものを具現化するようなものだと思います。

それから、向井千秋さんもそのミッションに乗ると聞いています。

村野 土井さんに、少し技術的なことをうかがいたい。衛星を捕まえるときに、地球の引力が働かない状態の中で、質量そのものの強さというか重さを感じられたようなんですけれども、それは地球上ではなかなか実験ができない。そのことの実感を教えていただきたい。

土井 宇宙は確かに無重力状態ですから、いわゆる地上でいう重さというものがなくなりま。しかし、重さがなくなったから物がなくなつたわけではなくて、確かにそこに存在しているわけです。

実際、ウインストンと私がスパルタン衛星をつかむとき、スペースシャトルは、ゆっくりゆっくりとスパルタン衛星に近づいていたんですね。ということは、つまりスパルタン衛星が私たちを静止していると見れば、スパルタン衛星の方がゆっくりゆっくり私たちに近づいてきたことになる。重さは一・五トンで、中型の普通自動車くらいです。それは地上でいうと、車がゆっくりゆっくりと自分の方に近づいてきて、それをわっと捕まえる、そういう感じが一番似ていると思います。私自身、つかんだときはか

なりずしりという力を感じました。その力が、スパルタン衛星を静止させるのに必要だったわけですね。

黒岩 生物実験の分析はこれからだと思うのですが、現段階で、新しい生物を宇宙で栽培するにあたって決定的に地球と違うと感じた点をお聞きしたい。第二点は、宇宙で食糧を栽培して人間が生きていけるのか、その可能性についてお聞きしたい。

レオニド・カデニューク いえ、まったく違いは見られなかったと思います。植物の成長にあたっては、地球上と違いはないと思います。しかし、アメリカの科学者六人と、ウクライナの科学者十六人がそれぞれ分担をし、この調査を行っているところですので、今、その結果を待っているところです。

プストヴィ 宇宙での植物と地上での植物の違いは、もちろん重力がないことです。重力は単に力ということだけではなく、やはり植物に影響を与える要素の一つです。重力があるから、植物はどの方向に成長すべきかがわかるわけです。たとえば、夜は光がないということで、植物は重力に対抗する方向に成長するわけです。宇宙での実験は植物はどのように発育するか、どの方向に伸びるのかということでした。

以前の実験との違い、あるいは共通性をみるという目的もありました。すべての要素を分析して結果を出すのはなかなか難しいわけです。それぞれテーマが違いますし、対象物も違う。今回は多数の実験を同時に同じ場所で行いました。植物も同じものを使ってやったのです。かなりいい結果が出るのではないかと思っていました。ですので、未来の世代に対して、宇宙でも植物は育ちそうだという感触が得られています。

今静行（個人D） 東京が初めての方もいらつしやると思いますが、何か食べたいものはありますか。

簡単に言ってしまうえば、テロリストが仕掛けた細菌兵器の爆発を食い止めるために、善玉と悪玉が死力を尽くして渡り合うアクション映画であるが、いやはや奇想天外な着想に驚いた。移植手術でFBI捜査官とテロリストの顔が、そっくり入れ替わるなどという発想は、日本人にはわからないたいものではないだろうか。

顔の皮をはいで、他人の顔に移植する手術が短時間で成功するなど、現代の医学ではあり得ないというようなヤボなせん索を横に置くと、二時間余りたつぷりと楽しめたし、この顔の入れ替わった二人に捜査官の妻が絡むことで、単なるアクション映画以上のもの

グレンダ・ロウズ 私はカンザス州のドイツ系社会に育ちました。そこでのエスニックというところ、ドイツ料理だったわけですね。ですから大人になってからは、いつも他の国の食事をするのが楽しみになりました。

クレイゲル それには私の方から答えたいと思います。ちょっと土井さんに言いたいことがあるんです。感謝祭の食事がありました、土井さんが「特別な日本食を作るよ」とおっしゃったんです。確かにカレーとご飯とがありました。本当においしかったです。

浅井恒雄（司会・企画委員） スペースシャトルで、カレーライスを作ってごちそうしたと聞いていますか？

でも、そのときに彼は、非常にステキな日本のお弁当を作ってくれたんです。それには梅干しが入っていました、写真にも撮りました。しかし、一個しかなかったんです。おいしそうに見えたんですけども、だれも食べられなかった。それがちよつと残念でした。

試写会

フェイス/オフ

に仕上がっている。

またもう一つの見所は、FBI捜査官を演じるジョン・トラボルタとテロリスト役のニコラス・ケイジの演技力である。この二人はお互いの顔が入れ替わる設定で、それぞれが善玉と悪玉を演じているのであるが、見事に成功している。特にニコラス・ケイジの演技。自分の顔が妻が最も憎んでいるテロリストの顔になってしまっているのだが、本当は自分こそが夫なのだということを、徐々に妻に信じさせていく場面は、さすがにアカデミー主演男優賞



をとった役者としての底力を見せてくれる。加えて『フェイス・オフ』の魅力は息をつかせぬアクションの連続にある。エアポートでの追跡、刑務所内の暴動、大銃撃戦、そしてモーターボートのチェイスと、これでもか、これでもかと供される規模の大きなアクションシーン。このサーピス精神こそ、ハリウッドエンターテインメントの神髄だと感心していたら、香港出身の監督の作品だと聞いて二度驚いた。

南海放送取締役東京支社長
真鍋八洲雄

プロフィール

◆個人D会員（五十音順）

新入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

写真部

写真 山本 浩

(一九八七年時事通信入社 福岡支社を経て 本社写真部)



日本女子で冬季五輪初の金メダル——フリー・スタイルスキーモーグル・里谷多英選手(2・11)

オリンピック効果

数々の名勝負、感動の名場面を生んだ冬の祭典は幕を閉じた。滑降コース設定をめぐるゴタゴタにはじまった大会運営の不手際、大麻疑惑の金メダルはく奪取り消し騒ぎ、ダフ屋の横行など汚点も残したが、まずまずの合格点だった。

重圧をバネにした日本選手の活躍に列島が熱く燃えた。閉そく感に打ちひしがれていた国民がストレスを発散させた。心をひとつにして興奮と感激を共有し、「一億総愛国者化」のオリンピック効果を生んだ。

雪辱を果たしたジャンプ・原田の涙、スケートの「小さな巨人」清水のさわやかさ、冬季史上女性初の大金星をあげたモーグル・里谷の現代っ娘ぶり——みんなみなよくやった。

だが、髪が乱れていたからとはいえ、里谷多英さんには表彰台で帽子を脱いでほしかった。あの笑顔がもっと美しく輝いたのに。

ともあれ、長野は世界中に感動と平和のメッセージを発信できた。地元の支援や子供たちの明るさもよかった。

開催中も心配されたイラク危機が、当面回避されたのは何よりもよかった。これも「世界はひとつ」の五輪効果か。

(和田千年)

会員変更届は所定の用紙で

入・退会や会員の入れ替えがある場合は、事務局の会員事務係までご連絡願います。所定の「変更届」があります。

また、法人会員社を退社され個人D会員として新たにご入会を希望される方も、所定の申し込み用紙がありますので、事務局までお問い合わせください。

役職や連絡先変更も必ずお知らせ願います。それに基づき、会報や記者会見案内のあて名を変更していただきます。聞き違いがあるといけませんので、できるだけFAXで新役職や新住所をお知らせいただくようご協力ください。

● 囲碁の会

二月の例会は二十二日(土)にクラブ宴会場で開催され、二十七人が参加しました。

今回の優秀賞は五戦全勝と「金メダル」並みの成績を上げた船山庄一会員(持ち点 一六七)のほか、日比野和幸(二六〇)、田川五郎(一五八)、高井明昌(一四五)、中俣富三郎(一二五)、吉川真澄(一〇四)、都留重人(七二)の各氏でした。次回の例会は四月四日(土)午後一時からです。初めての方も大歓迎です。ふるってご参加ください。

寄贈書

成功への羅針盤(広岡達朗著) 産経新聞社
月に一度(江藤淳著) " "
20世紀特派員 2 " "
Britain 1998 英国大使館広報部

来訪者

二月十七日、公明の浜四津敏子代表がクラブを表敬訪問、那部専務理事と懇談しました。

招待券

朝日新聞社から「色鍋島展」「さようならダイアナ元妃追悼写真展」の招待券をそれぞれご惠贈いただきました。お礼申し上げます。

ゲスト
カード

韓国記者研修(フォーリン・プレスセンター 3・11・3・21) 李洪秀
(全南日報) 宋延淳(大田日報) 朴昶爽(大邱日報) 金大準(濟州日報) 李炳哲(釜山日報) 崔乘賢(江原日報) 裴修鍊(釜山毎日新聞) 李昌秀(全羅毎日新聞)

会員現況

法人会員 一五〇社 基本会員 八一五人 個人会員 一、八二二人 法人・個人賛助会員 五八社 一八七人 特別賛助会員 五五人 名誉会員 一四人 計 二〇八社 二、八九三人

三月の行事(5日現在)

- 13日(金) 午後3時~4時30分 研究会「公務員倫理法」(一) 斎藤憲司・国立国会図書館行政法務課主査
- 18日(水) 午後0時30分~2時 鳩山由紀夫 民主党幹事長昼食会
- 23日(月) 午後3時~4時15分 ダイアン・ダマノスキ科学ジャーナリストを囲む会
- 25日(水) 午後4時~5時30分 研究会「公務員倫理法」(2) ヘザー・フォーリー駐日米大使夫人
- 26日(木) 午後3時30分~5時 研究会「インターネット・ビジネス」デビッド・ドーマン・ポイントキャスト 社会長

(行事案内電話) 〇三三三五〇三三三七六四

会報委員会

委員長 住田良能
委員 田村欣也 伊波新之助 大空博
 埜邑義道 和田千年 塚越喜昭
連絡 長谷川 本庄
(電話) 〇三三三五〇三三三七二二
(FAX) 〇三三三五〇三三三七二二